中学校

平成8年度

教育研究員研究報告書

外国語（英語）

東京都教育委員会

平成８年度

教育研究員名簿（外国語）

分科会名	区市町村名	学校名	氏名
第1分科会	江東区	第三亀戸中学校	西崎雅夫
	練馬区	練馬東中学校	石髙世裕
	江戸川区	二之江中学校	中澤淳之介
	国分寺市	第一中学校	相澤史彦
第2分科会	台東区	忍岡中学校	難波浩明
	世田谷区	桜丘中学校	○ 小松恵理子
	北区	紅葉中学校	柏木圭子
	板橋区	板橋第五中学校	北川哲郎
	八王子市	第一中学校	三橋玲子
	東村山市	東村山第四中学校	溝口千里
第3分科会	新宿区	牛込第三中学校	片岡美恵子
	文京区	第二中学校	□ 的早君枝
	杉並区	荻窪中学校	大河原昭広
	狛江市	狛江第四中学校	吉村達之
	多摩市	東落合中学校	宇田剛
	奥多摩町	小河内中学校	◎ 増沢強

◎ 世話人　○ 副世話人　□ 記録

担当　教育庁指導部中学校教育指導課指導主事　大野容義

研究主題

生徒が互いの個性を大切にし、生き生きとコミュニケーション活動に取り組む指導の工夫
── 自己表現力の育成を通して ──

目　　次

Ⅰ　研究主題及び主題設定の理由 …… 2

Ⅱ　研究の経過 …… 2

Ⅲ　研究の構想 …… 3

Ⅳ　研究の内容 …… 4

第1分科会

1　小主題 …… 4
2　小主題設定の理由 …… 4
3　仮説 …… 4
4　具体的な方策 …… 4
5　指導例 …… 5
6　研究の成果と課題 …… 8

第2分科会

1　小主題 …… 11
2　小主題設定の理由 …… 11
3　仮説 …… 11
4　実態調査の結果 …… 12
5　具体的な方策 …… 12
6　研究の成果と課題 …… 17

第3分科会

1　小主題 …… 18
2　小主題設定の理由 …… 18
3　仮説 …… 18
4　具体的な方策 …… 18
5　文通マニュアル …… 22
6　研究の成果と課題 …… 23

Ⅴ　まとめと今後の課題 …… 24

研究主題

生徒が互いの個性を大切にし、生き生きとコミュニケーション活動に取り組む指導の工夫
──自己表現力の育成を通して──

Ⅰ　主題設定の理由

激しく変化する今日の社会では、その変化に主体的に対応しながら、生涯にわたって自己実現を果たしていく、個性豊かでたくましい人間の育成が求められている。

本外国語部会ではこのことをふまえ、生徒同士が互いの個性を尊重し、人間関係を発展させていくことで、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。」という外国語科の目標を達成できると考えた。

コミュニケーション能力は実際にその言語を使用する中で育つ。さらに、豊かな人間関係は互いの個性を大切にしながら、互いを理解し合っていくことを通して培われる。そこで、本部会では、生徒と生徒、生徒と教師との間で、互いの考えなどのメッセージを伝え合う活動を授業の中に多く取り入れていくことが必要不可欠であると考え、上記の主題を設定した。

この研究を進めるに当たり、以下の３つの小主題を設定し、３分科会を設け、それぞれにおいて授業研究を通して指導の工夫・改善を図りながら研究を進めた。

第１分科会では「聞くこと」を中心として、「ビデオの活用を通して生徒の英語に対する興味・関心を引き出し、生きた英語を使おうとする意欲を育てる指導の工夫」という小主題を設定した。教材としてふさわしい洋画ビデオの中から生徒の自己表現に結びつけやすい場面を選び、内容理解や自己表現活動を目指した教材化を通して、より生き生きとしたコミュニケーション活動に取り組むことのできる指導の研究を進めた。

第２分科会では「話すこと」を中心に、「自己を表現する力を高め、生き生きとコミュニケーションを図ろうとする意欲を育てる指導の工夫」という小主題を設定し、課題解決のために英語を手段として用いる活動を通して、コミュニケーションへの意欲を高める指導の工夫をすることとした。その際、生徒が自分のもっている語いや表現で意思を伝える方法を継続的、段階的に学んでいくように配慮した。

第３分科会では「書くこと」を中心として、「writing に対する意欲と能力を高めるための指導の工夫」という小主題を設定した。real context（実際的状況）を設定し生徒のwritingにおける阻害要因を取り除くならば、生徒の writing に対する意欲を引き出し、コミュニケーション能力と自己表現力を高めることができると考え、本分科会の教員が勤める学校間での、生徒同士の文通によるメッセージの交換、という体験活動を通した研究を行った。

Ⅱ　研究の経過

総　会	４月12日	都立教育研究所	年間予定、自己紹介、世話人等の選出
第１回月例会	５月２日	台東区立忍岡中学校	研究主題決定、研究の進め方の検討
第２回月例会	５月31日	東村山市立東村山第四中学校	研究授業Ⅰ（溝口千里教諭）研究構想
第３回月例会	６月21日	狛江市立狛江第四中学校	研究授業Ⅱ（吉村達之教諭）仮説の検討
第４回月例会	７月15日	練馬区立練馬東中学校	研究・内容方法の具体化

御岳研究集会	8月20日～22日	青梅市御岳山宿坊	問題点の整理・検討
第5回月例会	9月12日	杉並区立荻窪中学校	実証授業Ⅰ（大河原昭広教諭）報告書計画
第6回月例会	10月3日	江東区立第三亀戸中学校	実証授業Ⅱ（西崎雅夫教諭）内容検討
第7回月例会	10月28日	世田谷区立桜丘中学校	実証授業Ⅲ（小松恵理子）原稿検討
第8回月例会	11月22日	国分寺市立第一中学校	最終原稿検討・提出　補助資料準備
第9回月例会	1月24日	板橋区立板橋第五中学校	発表会準備　公開授業指導案検討
研究発表会	2月13日	新宿区立牛込第三中学校	公開授業（片岡美恵子教諭）研究発表

Ⅲ　研究の構想

〈研　究　主　題〉

生徒が互いの個性を大切にし、生き生きとコミュニケーション活動に取り組む指導の工夫
── 自己表現力の育成を通して ──

第一分科会

小主題
ビデオの活用を通して生徒の英語に対する興味・関心を引き出し、生きた英語を使おうとする意欲を育てる指導の工夫

仮　説
話者の表情や動作を含めたリスニングにより内容の理解を深めることができれば、リスニングの活動は生き生きとした自己表現活動に結びつくだろう。

内容・方法
映画を教材化した production と role playing の活動

第二分科会

小主題
自己を表現する力を高め生き生きとコミュニケーションを図ろうとする意欲を育てる指導の工夫

仮　説
自分のもっている語いや表現で、意思を伝える方法を継続的・段階的に学んでいけば、生き生きとコミュニケーションしようとする意欲が高まるだろう。

内容・方法
要求・依頼、伝達、情報収集、人間関係形成の活動

第三分科会

小主題
writing に対する意欲と能力を高めるための指導の工夫

仮　説
実際的状況を設定し、生徒の writing における阻害要因を取り除けば、生徒の writing に対する意欲を引き出し、コミュニケーション能力と自己表現力を高めることができるであろう。

内容・方法
他校の生徒と英文による文通活動とその英文の分析

Ⅳ　研究の内容

第１分科会

1　小主題

ビデオの活用を通して、生徒の英語に対する興味・関心を引き出し、生きた英語を使おうとする意欲を育てる指導の工夫

2　小主題設定の理由

生徒たちは、「英語版の映画やビデオを見ること」や「日常生活に役立つ表現を覚えること」に強い興味・関心を示している。第一分科会ではこれに着目し、ビデオの中で用いられている言語材料を取り上げて授業を行いたいと考えた。ビデオを活用してのリスニングは、真性な（authentic）教材をそのままの環境で与えられる点で題材としてふさわしい。また、外国語習得の上で必要で欠くことのできない推測リスニング（inferential listening）の能力を育成できる点で、中学生の学習発達段階に適した指導内容とも考えられる。

さらに、リスニングの指導で学んだ表現を活用して、生徒自らの生き生きとした英語による表現がなされるならば、自己表現力の育成が効果的に進められるであろうと考えた。

3　仮説

話者の表情や動作を含めたリスニングにより内容の理解を深めることができれば、リスニングの活動は生き生きとした自己表現活動に結びつくであろう。

4　具体的な方策

生きた英語を使おうとする態度を育成するには、まず生徒自らがビデオや映画の中で使われた英語を発話しようとする意欲をもつように指導法を工夫することが大切である。特にその英語が使われている場面が本人にとって感動的なものであったり、印象的なものであれば、生徒にとってはその場面におけるセリフが心に残り、場面を思い出すたびにその英語が口をついて出てくるようになるものである。

そこで、本分科会では、鑑賞した映画やビデオで使われた言語材料を生徒の表現活動に取り入れた。また、発表活動は、言語材料を Production として扱う展開と、Roleplaying として扱う展開の２通りを作成した。

【Production 活動に発展させる授業展開】

(1)　音声又は画面のみの視聴
(2)　推測リスニングと内容理解
(3)　言語材料を実生活場面で使用する創作活動
(4)　Production の発表
(5)　生徒相互の評価

【Roleplaying 活動に発展させる授業展開】

(1)　音声又は画面のみの視聴
(2)　推測リスニングと内容理解
(3)　音読練習と役割練習
(4)　Roleplay の発表
(5)　生徒相互の評価

5　指導例

(1)　Production 活動に発展させる授業展開例

①　一学年の例【Dictation は単語レベルのもの。言語材料は比較的短いものを選んだ】

ア　ねらい　・映画の中で生き生きと使われているやさしい日常会話表現を聞きとる。

・映画の中の表現を用いた場面を創作し、生き生きと自己表現できる。

イ　指導過程・使用教材　「E．T」(1982 Universal Pictures) ワークシート 2 種類

・場　　面　エイリオットがE．Tを自分の家に入れ、兄や妹に会わせる場面

・言語材料　"Don't be afraid. It's all right." "Wait a second." "Stay. I'll be right here." "Why not?" "Give me a break."

段　　階	教　師　の　指　導	生　徒　の　活　動
Presentation	・本時の場面の直前までのストーリーをモニターに映す。	・映画の概要を知り、本時の場面を想像する。
Watch and Listen	・本時の場面を音声のみで聞かせる。(2 回行い映像は映さない)	・聞こえてくる会話に注意し、内容を推測する。 ・単語でもよいから聞き取れた表現を発表する。
Dictation	・モニターの字幕を隠し、音声と映像を流し、視聴させる。 ・ワークシートで聞き取れた英語をチェックさせる。 ・会話の内容を理解させる。 ・日本語字幕の場面を見せる。	・ワークシート 1 (資料 1) を用いて穴埋め個所の英語を聞き取る。 ・話者の表情や動作からも内容を推測する手がかりを得る。 ・場面の内容、言語材料の意味や登場人物の気持ちを考える。
Production	・言語材料を用いて実生活で生徒が使えそうな独自の場面を創作させる。 ・簡単な表現で会話を構成するようアドバイスする。	・個人又はグループで独自の会話をワークシート 2 (資料 2) に作成する。 ・会話は 4 つの文で構成する。
Reading Practice	・作成した会話を練習させる。	・豊かな表現になるように練習する。
Evaluation	・グループごとに発表させる。 ・発表後アドバイスを与える。	・発表し、相互評価をする。

【生徒の Production 例】（1年生）

夜母親に本を読んで～とねだる子供.

① Mom, please read this book.
② No I don't.
③ why not?
④ It's too late. You have to go to bed. Good night honey.

〈出かけるときの親子会話〉	〈犬のいる友達の家に行ったとき〉
A(母)：出かけるから用意しなさい。	A: Heres our dog.
B(子)：OK.（子供はゆっくり出かける用意）	B: I don't like dog. こわい…
A(母)：Hurry up!	A: Don't be afraid.
B(子)：Wait a second.	It's all right.

② 3学年の例【Dictation は文レベルのもの。Production の創作に十分な時間をとった。】

ア ねらい ・主に題材を聞くことを通し、内容を推測させる。
・題材中の表現を用い、独自の場面を想定し、生き生きと表現させる。

イ 指導過程 ・使用教材 「麗しのサブリナ」(Sabrina, 1954 Paramount Picture)
・場 面 サブリナが2年間のパリ生活を終え、華麗に変身して片想いであったデイビッドや、家族・仲間と再会する場面。
・言語材料 "It doesn't matter."

段　　階	教　師　の　指　導	生　徒　の　活　動
Presentation	・あらすじを生徒に知らせる。	・映画のあらすじを知る。
Watch and Listen	・題材となる場面の数分前からビデオを流し、場面では音声のみを聞かせ、会話内容を推測させる。	・前場面の映像をヒントにしながら、場面の会話の意味を推測する。
Dictation	・目標とする場面のビデオを数回流し、言語材料を聞き取らせる。 ・言語材料の使われ方を説明する	・ワークシートに聞き取った英語を書く。
Production	・場面の内容をよく理解させる。 ・言語材料を用いて独自の対話場面を創り出させる。 ・創り出した対話を練習させる。	・個人又は小グループで、実際によく使われそうな場面を考えて対話文を作る。 ・対話文を口頭練習する。
Evaluation	・グループ毎に発表させる。 ・教師による評価を行う。	・発表すると共に他のグループに対しても相互評価する。

【生徒の Production 例】（3年生）

Let's make conversations!

It doesn't matter.

class B no. 41 name Yukiko Shimizu

One day. Mary came home. Mike was in the home.

Mary : Hello.
Mike : Hello, Mary. I'm sorry. I ate your cakes
Mary : Oh, no! I like cakes very much ....
Mike : I'm sorry. I'm sorry ....
Mary : But .... It doesn't matter.
These cakes were our mother's.

(2)　Roleplaying 活動に発展させる授業展開例

ア　ねらい　・日常の会話表現を知り、native speaker の話す英語の速さや発音の特徴に慣れる。

・どんな場面か理解でき、同時に登場人物の気持ちを理解できる。

・登場人物の気持ちになって、英語で表現できる。

イ　指導過程・使用教材　「ローマの休日」

・場　　面　アン王女が大使館に戻るために、車の中でジョーと別れる場面

・言語材料　"I have to leave you now."

"I don't know how to say good-bye."

段　　階	教　師　の　活　動	生　徒　の　活　動
Presentation	・登場人物やあらすじを知らせる。	・映画の概要を知る。
Watch and Listen	・言語材料の少し前の画面を見せる。 ・字幕を隠し、どんな内容かを考えさせる。	・画面を見ながら英語を聞き取る ・二人の言葉や表情、動作からどんな場面かを考えさせる。
Reading and Roleplaying	・シナリオを配布し、役割を決めて読みの練習をさせる。	・役柄の気持ちをうまく表現できるよう発表の練習をする。
Evaluation	・ペアで発表をさせ、生徒相互に評価させる。	・Roleplay を発表しあい、お互いに評価し合う。

6　研究の成果と課題

〈推測能力を刺激する指導〉　通常のカセットテープやＣＤによる授業とは異なり、映像や話者の動作・表情をまじえたリスニングは生徒の興味・関心を高める効果がある。また、そのために授業中の生徒の活動や雰囲気には充実感があふれる。ビデオを通してのリスニング活動は推測リスニング（Inferential Listening）の能力向上にもつながる。リスニング能力は、冗長性をいかに把握できるかで違いが出てくる。また、冗長性を把握するためには推測能力が要求される。論理的思考力が伸長する中学生の発達段階を考えたとき、推測能力を刺激するこの活動は、是非とも指導過程の中に取り入れたい要素である。

〈Production 活動を取り入れた授業〉　日ごろの授業ではリスニング能力を高める指導（T or F, Q&A, Listening Test, etc）は継続してはいるが、リスニングの活動を、自己表現活動に結びつけていく指導はほとんどなされていないのが実情であった。そこで、本研究では、日常的な会話表現をリスニングを中心に学習させるとともに、創作活動を交えて、自己表現活動に生き生きと楽しく取り組ませるねらいがあった。

教材に映画を使用したことにより、生徒は英語を話したいとか、聞き取りたいという関心を強くもち、積極的に授業に取り組んでいた。音声から画面を推測したり、逆に音声を

聞かずに画面を見ることでその場面から会話内容を理解したりするなど、映像と音声の両面からの生きた英語が訴えるものは大きく、リスニング教材としては絶好だった。

自己表現活動については、個人に作成させ、発表させるという形式をとったが、最初は戸惑いながらも、とても積極的に活動していた。生徒には学習した英語を実際の場面で表現したいという願いが強くあることがわかった。発表には一人一人の生徒の個性が鮮やかに出て、授業が生き生きとしたものになった。

題材とする映画については、選択に苦慮した。とりわけ、1年生の場合は利用できる言語材料に限りがあり、リスニングの指導においても、自分独自の会話を作成する活動においても十分な配慮と教師の援助を必要とする。英語の台詞についてはシナリオが書かれた印刷物も利用した。

〈Roleplaying 活動を取り入れた授業〉　リスニング活動から Roleplaying 活動に発展させようという試みだった。課題としては、Roleplaying 活動で求められる「暗記」がまず大変だということと、ペアの発表では英語はきちんと言えているが照れがあるのか、感情を込めて発表するというところまでは達していないペアが多かったことである。しかし、生徒の活動の様子はけっして消極的ではなく、むしろ教科書中心のふだんの授業よりは生き生きと取り組む姿が多く見られた。特に Roleplaying のグループ内の発表は楽しく取り組んでいた。Roleplaying 活動は、場面に応じた英語の使い方を身に付け、台詞に感情移入することによって自己表現力を育てるという点で、効果的である。さらに、下記の点に留意して授業を行うならば、より効果が上がると思われる。

- 生徒の関心が高い映画を選ぶ。
- 印象的な場面を選ぶ。
- 英語が聞き取りやすい場面を選ぶ。
- 中学生にふさわしい言語材料を選ぶ。
- 場面を何度もプレイバックして、じっくりと登場人物の観察をさせる。
- 小道具などで、実感を盛り上げる。
- 記憶が容易にできる長さの会話の場面を選ぶ。
- 教師自らロールプレイングを行う。

資料1

ワークシート①　CLASS　NO.　NAME(　　)

ELLIOTT :	Come on. (1　　). Come on. Come on-Come on. Come on. Come on-Come on. Do you talk? You know, talk? Me, human, boy. Elliott. Ell-ee-ut. Eliott. Coke. See, we drink it. …… And then this is a car. We-this is what we get around in-See? Car. Hey! Hey, (2　　)! No! You don't eat them. Are you hungry? I'm hungry-(3　　). Okay?

資料２

ワークシート②

「映画で英語！」創作プリント　1年　組（　）

E．T．で学習した文型

① Don't be afraid.　It's all right.　恐がらなくていいよ。大丈夫だよ。

② Wait a second.　ちょっと待って。

③ Stay.　I'll be right here.　ここにいて。すぐ戻るから。

④ Why not?　どうして駄目なの？

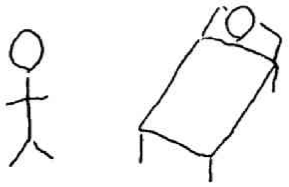
⑤ Give me a break.　冗談きついよ。

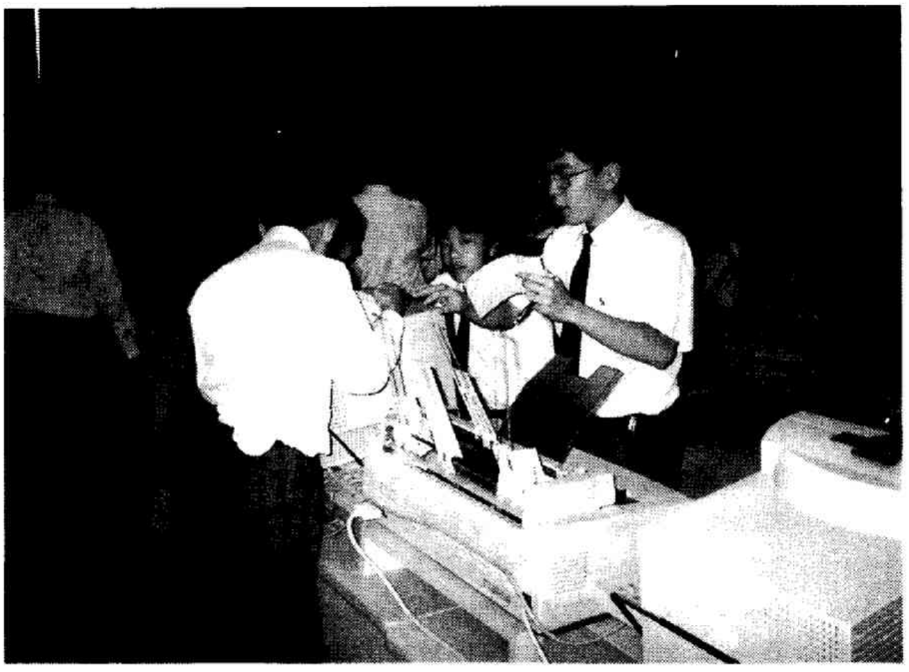
応用場面の創作（自分ならこんな場面で使ってみる）①～⑤のうちどれか一つについて。

・最低４つの文章を組み合わせて会話を作ろう！

場面　出かける前

A：Hurry up.
B：I'm comeing.
A：We have no time!
B：Wait a second.





第２分科会

1　小主題

自己を表現する力を高め、生き生きとコミュニケーションを図ろうとする意欲を育てる指導の工夫

2　小主題設定の理由

国際化が急速に進み、地球的な視野に立った交流や相互理解が深まっていく中、英語を手段として、外国の人々とコミュニケーションを図り、自由自在に自分の意思を伝えることにあこがれを抱いている生徒は数多い。

しかしながら、日常生活を振り返ってみると、帰国生徒や在日外国人の数が増加してきているとはいえ、自分自身の習ってきた英語を実際に用いてコミュニケーションできる機会はほとんどないと言わざるをえない。

たしかに、私たち英語科の教員は、日ごろの授業の中で、自己表現力を高めるために、ペアワークやスキットなどの言語活動を活発に取り入れてはきた。しかし、それらの活動は、「自ら状況を判断して、言葉を選択し、主体的に英語を使っていく活動」であるというよりも、「あらかじめ決められた英語を会話感覚で覚えていく活動」に近かったために、実際のコミュニケーションの場（ＡＬＴとの自由な会話等）においては、十分に対応できないといった課題が残っていた。そのために、生徒はコミュニケーションへの自信がもてず、意欲も高まらないのではないかと推察した。

以上の事柄を踏まえて、本分科会では、日ごろの授業の中に、『今までに習ってきた英語を実際に用いながら、たとえ文法的には不正確な表現ではあっても、自分自身の生きた言葉で課題を解決していくような学習』を継続的・段階的に取り入れていくことが、生徒の自己表現力を高め、生き生きとコミュニケーションを図ろうとする意欲につながっていくのではないかと考えた。

また、課題を解決していく過程においては、個性や個人差・学力差などに応じて、難しい表現を簡単な表現にパラフレーズしたり、ジェスチャーなどのノンヴァーバルな伝達手段を用いるなど、多様なコミュニケーションの方法が存在するはずである。たとえ、完ぺきな英語ではなくとも、試行錯誤をしながら、前向きに意思を伝えようとする姿勢をみんなで大切にしあい、個性豊かな多様なコミュニケーションの方法をお互いに認め合えるような指導上の配慮をしていきたいと考えた。

3　仮説

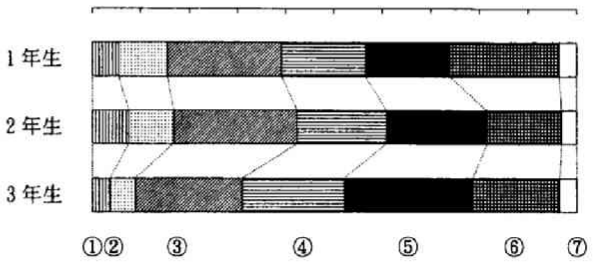
自分のもっている語いや表現で、意思を伝える方法を継続的・段階的に学んでいけば、生き生きとコミュニケーションしようとする意欲が高まるだろう

4　実態調査の結果

7月の初旬に、実際のコミュニケーションの場面で、自己表現する際に大きな支えとなるスキルのレベルを知るために、アンケート調査を行った。都内6校の1年生から3年生までの中学生、約2,300名から回答を得ることができた。以下がその内容と分析である。

＊あなたが外国の人と話す場面を考えてください。辞書も筆記用具もない状況で、「自分の言いたいことや、伝えなければならないこと」を英語で言わなければならないのに、わからない単語（語句・表現）があって困った時、あなたならどうしますか。複数の該当がある時には、番号の大きい方をひとつだけ選んでください。

①黙ってしまう。
②日本語を使ってしまう。
③ジェスチャーで切り抜ける。
④「わからない」「困っている」ということを英語で伝える。
⑤正しくなくても、自分で考えた英語（語句・文）でなんとか伝えようとする。
⑥わからない言葉を、英語で説明したり、自分の知っている似たような内容を表す表現で言い換えてみる。
⑦その他。



番号が大きいほどコミュニケーションスキルが高いという設定なので、学年が上がるにつれて大きい番号の割合も増えるのではないか、という私たちの予想に反し、最も高いスキルの⑥番が多かったのは、1年生であった。英語を習い始めて間もなく、つまずきを感じている生徒が少ないため、コミュニケーションに対しても、自信や意欲をもっていることがうかがえる。このことから、学年が上がっても、生徒が自信や意欲を失わないような指導の工夫をしていく必要があることがわかる。

次に、①「黙ってしまう」から④「わからないということを英語で伝える」という段階にとどまっている生徒が、各学年とも50%を超えているという点に注目したい。これらの生徒のスキルをあげるためには、間違いをおそれることなく、自分の伝えたいことを表現する練習を日ごろから行うことが大切である。

5　具体的な方策

本分科会では仮説に基づき、授業の中で、解決すべき課題を含む場面を意図的に設定し、「英語で課題解決する力」を育てる指導の工夫をした。

場面及び課題設定に際しては、生徒たちが意欲的に取り組みそうな題材にし、意味のあるやりとりとなるよう心掛けた。さらに、実際のコミュニケーションに即したものとなるよう、コミュニケーションが本来もつ機能を、「要求、伝達、情報収集、人間関係形成」に大別し、それら4つの側面からの適切な課題設定を試みた。ここに、それぞれの指導例を紹介する。

(1)　要求・依頼　（自分の要求を相手に伝え、実践してもらう活動）
(2)　伝達　（自分のもっている情報を相手に伝える活動）
(3)　情報収集　（自分にとって必要な情報を相手から得る活動）
(4)　人間関係形成　（より多くの言葉のキャッチボールを通じて相互理解をはかる活動）

(1) 「要求・依頼」の指導例

指令書学習

カードに書かれた日本語の指令に従って、生徒がＡＬＴに話しかけ、コミュニケーションをとる活動

① 指導のねらい

ア 必要なことがらをＡＬＴに的確に伝える能力を育てる。

イ 自分の言葉を使ってコミュニケーションができるという自信をつける。

② 指導過程

ア 所要時間　約20分

イ 準　備　指令書カード６枚（各班１枚　それぞれ異なったもの）

〈指令書例〉

――― アメリカの花屋にて －－Rick 先生は店員です。―――

今夜、あなたの友達のピアノコンサートがあります。その友達のために花束（花）を買いなさい。あなたは20ドル（ダラーズ）しか持っていません。

ウ 手順

1) 指令書カードを各班（６～７人）１枚ずつ受けとる。

2) 指令書の内容について、どのようにＡＬＴに話しかけたらよいかを各班ごとに話し合う。このとき、辞書は使わない。（約５分）

3) 各班１～３名の代表を出し、ＡＬＴとコミュニケーションをとる。（各班約２分）

上記指令書で実際行なわれた会話（１年生）

ALT　: May I help you?
Student: I go my friend's piano concert.
A: Your friend's piano concert? Tonight?
S: Yes. I want 20 dollars flowers.
A: You want 20 dollars of flowers?
S: Yes.
A: What color?
S: I want rose.
A: Roses? OK. This is 20 dollars of roses. Do you want this one?
S: Yes.
A: You do?
S: Yes.
A: OK. Twenty dollars please.
S: Here you are.
A: Thank you.
S: Thank you.

〈指令書ゲームの感想〉

とってもおもしろくていいと思う。本物の外国人と話す体験ができるので、例えば将来、海外旅行などへ行ったりしたときに、（まちがっていてもいいから）どう言えば伝わるかが具体的に分かるし、班のみんなと相談しながらやるので「まちがえてもいいから」と勇気がわく。

4) ＪＴＥは、指令が成就されたと判断できた時点で終了のサインを出す。

③ 評価の観点

ア カードの要求・依頼の内容を的確に伝えられたか。

イ 単語だけでなく、文を使ってコミュニケーションできたか。

ウ つまったとき、言い換え・ジェスチャー等、種々の方法で乗り越えられたか。

(2) 「伝達」の指導例

先生にメッセージを伝えよう

英語で伝言を相手に伝えたり、自分の状況を説明したりする活動

① 指導のねらい

ア 情報のポイントとなる事柄を見極める力を育てる。

イ 情報を英語で積極的に表現しようとする態度を育てる。

② 指導過程

ア 人数 6人くらいの班を1グループとし、その中の2人が実際に活動する。

イ 時間 グループでの作戦タイム：3分程度 実際の活動：2分程度

ウ 手順

1) 班ごとに、英語で伝言を伝える者を2名決める。

2) 「先生がいないときに、電話がかかってきた」という設定で、先生に伝えるメッセージを班で考え、それをカードに記入する。(具体例1)

3) メッセージを伝えるために必要な表現を班ごとに考える。

4) 代表生徒がＡＬＴに英語で伝言を伝える。

5) 1)～4)の手順で、困っていることや先生にお願いすることを2～3分で考えて、英語で伝える形式でも行うこともできる。(具体例2)

具体例1 ○○君から先生に電話がありました。デートしたいので明日3時に映画館前に来てください。また後で電話します。

具体例2 (ＡＬＴに対して) 今夜、先生と一緒に盆踊りを見に来てください。せっかく日本にいるのだし、近く祭りがあるからついでに見てほしいです。

③ 評価の観点

ア 日本語の言い回しにとらわれずに、メッセージのポイントをつかんで表現することができたか。

イ 単語レベルであっても適切な単語を使って、意思を通じさせることができたか。

ウ 情報を伝えようとする前向きの姿勢で取り組むことができたか。

(3) 「情報収集」の指導例

ペンフレンドを紹介しあおう

渡された指示書に書いてある情報をもとに、自分たちの友人に合った文通相手を探し当てるゲーム

① 指導のねらい

ア 外国の人と文通しようという動機づけとする。

イ 班活動を通して、協力して課題を解決することのよさを体験する。

ウ 3単元の肯定文、doesを使った疑問文・応答文、否定文を効果的に使って、友達のことについて会話できるようにする。

② 指導過程

ア 時間 班活動約40分。(作戦タイム20分程度、質問15分程度)

イ 準備 6種類の指示書と指示書の内容を質問しやすくするためのヒントカード。指示書には、自分の友人に関する情報(国籍、性別、趣味など)が英語で、その友人の希望する文通相手の条件(国籍、性別、趣味など)が日本語で書かれている。

ウ　手順

1)　班毎に、指示書の「あなたはこんな友人をもっています」の英文をよく理解する。
2)　次に、「あなたの友人の求める文通相手は」の内容に合う相手を探すための質問事項（英文）を相談し、作成する。
3)　ＪＴＥは途中でヒントカードを渡し、英文を考えるための手助けをする。
4)　質問は１班から順に一問ずつ発表し、その都度、各班が答える。
5)　質問と返答が何順かして相手が絞られてきたら、答える班を指定して質問することもできる。
6)　質問をすべて終えた時点で、何班の友人が自分の班の求める相手であるかを当てる。

エ　配慮事項

1)　作戦タイムのときの助言は、単語や表現そのものを教えることは避け、パラフレーズの仕方を助言する。
2)　質問や答えは、班員全員が順に行うようにさせる。
3)　最後に、各班で考えた表現でよかったものを教師の方から紹介し、個人単位の活動でも生かせるようにする。

③　評価の観点

ア　適切な質問によって、相手を探し当てることができたか。
イ　班で協力して活動できたか。
ウ　ヒントカードを有効に利用できたか。
エ　３単元の文を適切に使用できたか。

④　指示書６種類のうちのペアとなる組み合わせ例

「あなたはこんな友人をもっています」
You have a good friend. He is Australian. He speaks English. He likes music very much.
①「あなたの友人の求める文通相手は」
彼はオーストラリア以外の英語圏の人と英語で文通したいんだって。彼は音楽好きだから何か楽器のできる人。女の子だとさらにいいね。

「あなたはこんな友人をもっています」
You know a good girl. The girl is American. She speaks English. She plays the piano.
②「あなたの友人の求める文通相手は」
彼女はオーストラリア人の男の子と英語で文通したいんだって。できたら同じ趣味の人がいいわね。

⑤ヒントカード例（①の指示書の場合）

〈質問を考える上でのヒント〉

1　オーストラリア以外の英語圏の人とは？－例えば（　　人）や（　　人）等、具体的に例をあげてそういう友人がいるか（そういう人を知っているか）聞いてみよう。
2　その人は女の子か聞いてみよう。
3　その人は英語が話せるか聞いて確かめてみよう。
4　思いつく楽器には何があるかな？－例えば（　　）や（　　）等、具体的なものをあげて、その人はそういう楽器ができるか聞いてみよう。

(4)　「人間関係形成」の指導例

おしゃべりタイム

指定された話題又は生徒自ら設定した話題を基に、ＡＬＴとの人間関係を重視した自由対話

①　指導のねらい

ア　ＡＬＴとの自然な対話を通して、本当に伝えたいこと、聞きたいこと（意思や気持ちを含めて）を述べることを通して、個性豊かな自己表現能力を高める。

イ　できるだけ長く楽しい対話を続けて、ＡＬＴとの相互理解を図り、よりよい人間関係を形成しようとする態度を育てる。

ウ　ＡＬＴとコミュニケーションを図ることができたという自信をもち、積極的に英語で話そうとする意欲を育てる。

②　指導過程

ア　手順

1)　グループごとに別の話題を与える。又は、生徒が話題を考える。

－与えた話題例－

＊自分とＡＬＴの先生の夏休みの過ごし方

＊運動会について印象に残ったこと

－生徒が考えた話題例－

＊オリンピックで印象に残ったこと

＊自分とＡＬＴの先生が好きな食べ物、趣味について

生徒の感想

3. 今日の授業の感想

今日初めて、あんなにたくさん話して、けっこう思っていたより楽しかった。何をきこうか考えてほったけど、あっていなかったかもしれないけれど、ジョナサン先生が答えてくれて、うれしかった。私でも、伝えたいことを伝えることができるんだと少し自信がついた。

2)　10分程度の作戦タイムをとり、伝えたいこと、聞かれそうなことについてグループで協力して準備する。

3)　各グループでＡＬＴと対話をする代表生徒１名と補助の生徒１名を選ぶ。

4)　各グループの代表が交代で前に出て、それぞれの話題についてＡＬＴの先生と自由に対話をする。補助の生徒は代表生徒を助けるだけで直接には対話をしない。

5)　対話を聞いている他の生徒は、対話からわかったことをワークシートに書く。

6)　ＪＴＥは何往復の会話になったか数える。対話が途切れたところで終了とする。

7)　ＡＬＴはグループごとに良かった点を述べ、今後に役立ちそうな表現を紹介する。

イ　指導上の留意点

1)　文法的誤り、発音の指導は最小限にする。

2)　完全な文でなく、単語レベルでもよしとし、コミュニケーションを図ろうとする態度を尊重する。

3)　時間の制約上、昼休み、放課後などを活用し、より多くの生徒がＡＬＴとの対話の機会をもてるよう配慮する。

③　評価

ア　相手の話に応じて適切にコミュニケーションを図ることができたか。

イ　長く対話を続けることができたか。

ウ　対話を通して相互理解を図り、より良い人間関係を形成しようとしたか。

6　研究の成果と課題

本分科会の実践研究の過程において、生徒は、「自分のもっている語いや表現を十分に活用すれば、かなりの内容を英語で伝えることができる。」という自信をもつようになってきた。以下に、成果と課題を述べる。

(1)　成果

ア　英語で表現することができずに沈黙してしまうことが少なくなり、単語レベルであっても、意思を伝えようとする態度が育ってきた。

イ　単語レベルで意思を伝えていた生徒が、たとえ間違いを含んだ文であっても、文のレベルで話す努力をするようになった。

ウ　コミュニケーションするときに、まず自分のもっている語いや表現で、言えることから言おうとして、情報を選択するようになった。

エ　日本語の表現にとらわれずに、情報を選択して、ポイントを伝えようとするようになった。

オ　自分の知らない単語を表現するときに造語するようになった。生徒がつくった語が実際には使われないような語であったとしても、意思を伝えようとする積極的な姿勢を評価していきたい。

(2)　課題

ア　様々な活動をするほど、多くの生徒が自信をもつことができるようになった反面、活動の壁となるのは、表現や語いの不足である。基礎的な事柄を習得させ、なるべく多くの表現や語いを身に付けさせることが大切である。またそうすることによって、コミュニケーション活動への意欲も増してくるだろう。

イ　英語の学習をする上で何よりも大切なのは、英語を使って自己表現することの楽しさを生徒に感じさせることである。そのために、生徒に解決させる課題は、生徒の発達段階や学習内容に適したものとすることが必要となる。難しすぎたり、やさしすぎたりする課題では生徒の意欲を引き出すことはできない。

ウ　いろいろな表現を身に付けさせるためには、生徒が解決する課題の種類が多いほど、成果を上げることができる。しかし、限られた時間内での課題作成は、大変な労力が必要なため、教師同士の情報交換や協力体制を積極的に進めていく必要がある。

エ　ゲーム的な活動の中では、「英語だけで意思を伝える」というルールを作っていても、つい生徒は日本語を使ってしまいがちである。楽しい雰囲気の中にも、目的を生徒によく理解させ、ルールを守って活動させることが、大きな成果を上げるために必要である。

オ　意欲的にコミュニケーションを行おうとする態度を育成するために、英語が苦手な生徒も喜んで言語活動に参加できるように補助手段を考えるなどの工夫と配慮をさらに研究していきたい。

第3分科会

1　小主題

writingに対する意欲と能力を高めるための指導の工夫

2　小主題設定の理由

本分科会では、生徒が敬遠しがちであると同時に教師の指導が比較的十分になされていないと思われるwritingにスポットを当て、生徒のwritingの意欲と能力を引き出し高める指導法について、具体的に研究を進めることにした。また、その指導目標をfree writingにまで高めることに置いた。

3　仮説

real context（実際的状況）を設定し、生徒のwritingにおける阻害要因（単語の配列や表現方法等におけるつまずきの原因）を取り除けば、生徒のwritingに対する意欲を引き出し、理解と自己表現の能力を高めることができるであろう。

4　具体的な方策

(1)　総論

本研究では、writingを言語相互作用に不可欠なcommunicative competenceの一部を成す言語活動と定義する。すなわち、「読み手を意識した言語交渉のプロセス」であり、「書き手が無言の対話を記録し、読み手の反応を予測する」学習である。ここでは教室で展開される指導手順を、1 controlled writing　2 guided writing　3 free writingの三段階に分け、最終的な目標を3の自由な英作文を書くこととする。

仮説に基づき、生徒が英語を実際に使用しなくてはならない状況を設定し、生徒の書くことに対する不安を取り除きながら、書くことに対する意欲を引き出すことを通して、recognitionとself expressionの能力を高めることを目的とした。具体的には、各中学校間で生徒一人一人に英文の手紙を交換させ、毎回token & type値を算出することにより、「書くこと」の指導の工夫・改善を試みた。

token & type値（TT値）

単語の数を計算する方法として、token countとtype countがある。token countとは、発話者が使用した単語すべての総数を示すもので、使用された単語を同一の種類別に分類した総数をさす。したがって、type countは、単語を何度使用しても1つとしか数えない。

例えば、When she arrived at the house, they were waiting for her at the door. の文においては、token countは14、type countは12ということになる。

この際、type countをtoken countで割ったものをtoken & type値といい、その数値が限りなく1に近いほど英語力が身に付いていると一般的に言われている。

(2) 指導の手順

① 各段階の目標

第1段階 「思ったことを表現する」

第2段階 「相手の話題を考えながら表現する」

第3段階 「相手の意向をくみ取りながら、表現する」

② 各段階の指導内容及び留意点

段階	○教師の指導内容 △教師による分析作業	留　意　点
第1段階	○同規模学校の同学年同士でペアを作る。 ○自己紹介文を書かせる。(辞書の使用可) △下書きの段階でＴＴ値の集計を行う。 ○語法上の誤りをチェックし、各自に清書させ、相手校に郵送する。	・基本的に1対1で行えるようにする。 ・手紙文の書き方を説明した後で、自由に書かせる。 ・集計には英語係等を使うと良い。 ・清書用には色上質紙等を使用し、意識付けをする。
第2段階	○相手校からの手紙に返事を書かせる。 △下書きの段階でＴＴ値の集計を行い、1回目との比較、分析を行う。 ○語法上の誤りをチェックし、各自に清書させ、相手校に郵送する。 ○△「意識調査(1)」を実施し、分析する。	・相手校からの手紙を各生徒に渡す。 ・ＴＴ値の推移を見ながら、語い数の変化をグループ別に分け検証する。 ・清書用には色上質紙等を使用し、意識付けをしながら絵等も描かせる。
第3段階	○つまずきの原因を取り除く指導を行う。 ○自分あての手紙に返事を書かせる。 △下書きの段階でＴＴ値の集計を行い、1・2回目との比較、検証を行う。 ○語法上の誤りをチェックし、各自に清書させ、相手校に郵送する。 ○△「意識調査(2)」を実施し、分析する。	・個に応じた指導を行う。 ・相手からの話題を発展させる。 ・英語の成績別に3段階に分け、各グループの特色を比較分析する。 ・清書用には色上質紙等を用いて絵を描くなど、楽しい手紙にする。

(3) 評価

今回の研究で得られた結果を、英文を独力で書く力をどれだけつけたかという「writingにおける能力面」と、英文を書こうという気持ちをどれだけ強くもったかという「writingに対する意欲面」の二つに分けて評価してみた。

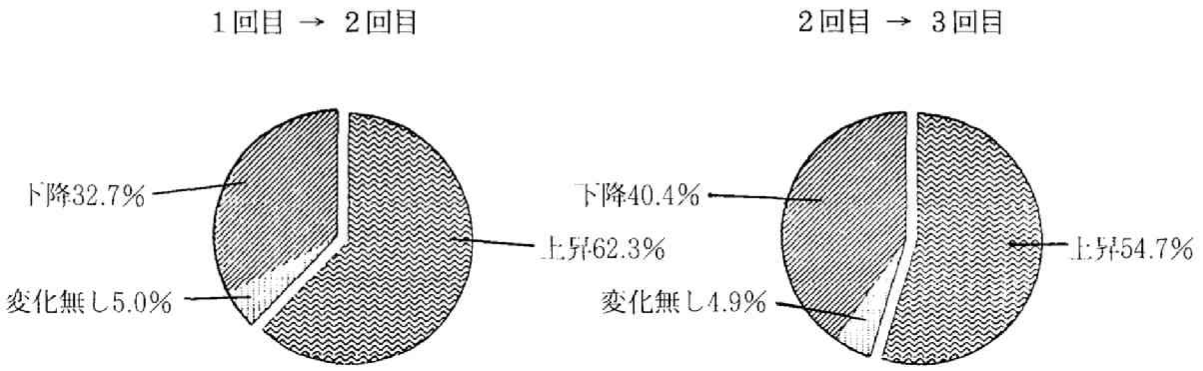
① writingにおける能力面

生徒の英文を書く能力を測る方法として、前述のＴＴ値を用いた。そして、生徒が手紙を3回にわたって書いたときの数値の変化を見た。なお、数値を計測した各時点で生徒が手紙を書いた状況は、表①のとおりである。

表①

回数	書いた手紙の相手	その手紙を書いたときの状況
1	不特定の1人（Dear Friend,...）	自力で、初めての相手に手紙を書いた。
2	特定の1人（Dear ○○○,...）	自力で、来た手紙を読み返事を書いた。
3	特定の1人（Dear ○○○,...）	教師の指導を得て、自分あての返事の手紙に対し、さらにその返事を書いた。

グラフ①　「ＴＴ値が上昇した生徒の割合」



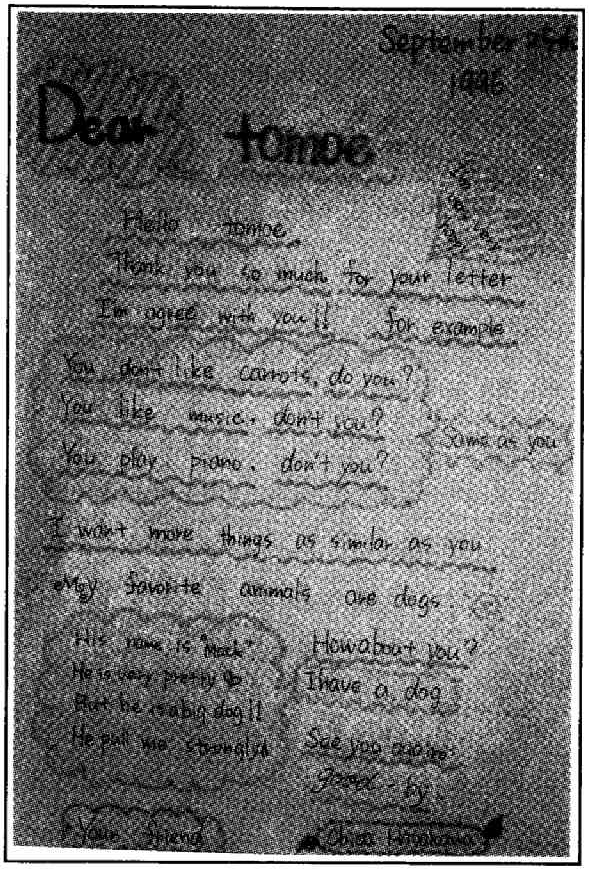
グラフ①にあるように、1回目と2回目、2回目と3回目のＴＴ値をそれぞれ比較した結果、以下の点がわかった。

ア　いずれも多くの生徒のＴＴ値が上昇している。このことは、それだけ多くの異なった単語を使った結果であり、表現が豊かになったということが言える。

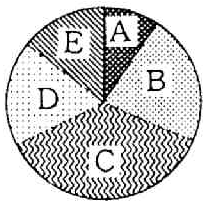
イ　1回目→2回目については、実在する相手に出した手紙に対して返事がきたことで、相手に伝えたいことや聞きたいことが増え、話題が第1回目の手紙文より広がったことと、相手が手紙の中で使っている表現を学び、それを応用して自分の手紙文の中に取り込んだことが、ＴＴ値の上昇の原因として考えられる。

ウ　2回目→3回目については、教師の指導から英文で手紙を書くときのポイント（同じ語の繰り返しを避ける、等）を学び、書く内容に関して個別に指導を受けたことがＴＴ値を上昇させた原因として考えられる。

また、意識調査の結果から、英文を書くときに阻害要因となっているいくつかの項目に、指導によって改善が見られた。生徒相互の手紙のやりとりの過程で、「つまずき」に対する教師の指導を加えることで、生徒の英文を書く能力を高めることができたといえる。ただし、比較的英語を得意とする生徒の伸びが顕著である反面、不得意な生徒の伸びは少なかった。このことは指導の上で十分留意すべき点である。

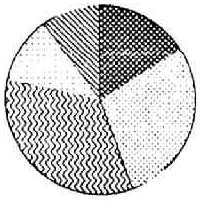


グラフ②　「英語で文章を書くことに対するイメージ」

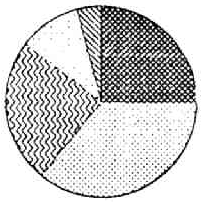


手紙を書く前

A：楽しい
B：どちらかというと楽しい
C：どちらともいえない
D：どちらかというとつまらない
E：つまらない



1・2回目を書いた後



3回目を書いた後

② writing に対する意欲面

英語で手紙文を書く作業の過程で、対象となった生徒約400名に対して意識調査を実施した。この中で、「今回の手紙文を書く前」、「1回目・2回目を書いた後」、「3回目を書いた後」の3段階に分けて、それぞれ「英語で文章を書くこと」に対して、どんなイメージをもっているかを聞いてみた。その結果がグラフ②である。このことから以下の点がわかった。

ア　段階を追うごとに、英語で文章を書くことを、「楽しい」「どちらかというと楽しい」というイメージでとらえている生徒が増加し、逆に「どちらともいえない」「どちらかというとつまらない」「つまらない」というイメージでとらえている生徒が減少している。

イ　その要因としては、相手が架空の人物でなく、実在する相手から返事が来るという期待感や、実際に書くことで少しずつ自信がつき、英文を書くことに対する抵抗感が薄れたことなどが大きく影響していると思われる。

生徒が手紙文の中で使用した語数（総語数）の推移を見ると、回を重ねるごとに増加している生徒が大半を占め、それだけ表現したい内容も増えたということが言えよう。こういった点で、今回の活動が生徒の意欲を引き出し、多くの生徒が英文を書くことの楽しさを味わったと考えられる。「相手が本当にいるということで、楽しさがすごく違う。」、「前より英語で文を書くのが好きになった。」という生徒の感想からもそれがうかがえるが、「手紙はあまり楽しくない。」「単語や文の配列が難しい。」と感じている生徒もおり、こういった生徒への指導上の配慮が必要であることは言うまでもない。

5　文通マニュール

実際に、同年代の生徒がお互いに手紙を出し合うことにより、英文を書くことに興味・関心を示し、自己表現力を高められる。また、お互いを尊重し、楽しみながら学習しあうことができる。下記のマニュアルはそのような特色をもった学校間の文通方法の手順である。

（※印は留意点を示す）

(1)
文通相手校を選定し、相手校の英語担当教師に申し入れる。
↓
（承諾）
これからの手順を相談する。
☆手紙を最初に出す順番を決める
☆留意点の確認

※1 両校の学年、人数を配慮する。
→同学年で人数がほぼ同じ方が良いが、相違がある場合は少ないほうに合わせる。
（A 校 100人 ： B 校 50人の場合、2 対 1 で行う）
※2 生活環境の違う学校の方が話題が豊富になり、生徒の興味を喚起しやすい。

(2)
【A 校】・・最初に手紙を出す学校とする
第1回目の手紙の下書きを書く。この時点では相手のことは何もわからないので、自己紹介、学校、環境、相手のへの簡単な質問、等を書く。
＜必需品＞和英・英和辞書
その他参考資料

※1 作業に入る前に英文手紙の書式を指導する。
※2 内容や表現は個別に助言、指導する。
○相手校の情報を教える。
※3 語数は 50 ～ 80 語を目安に、それ以上書ける生徒は自由に書く。
※4 授業配当時間は3～4時間以内で連続して行う。
※5 宿題や家庭学習にせず、必ず授業時に行い、教師の指導が入るようにする。

(3)
【A 校】
教師が下書きの誤りを確認訂正し、清書をする。
（色上質紙など）
↓
クラス－学校単位で発送

※1 丁寧に書くように指導する。
（特に名前－本人、相手）
※2 全員に提出させる。
・・その時により出さない生徒がいると、相手が混乱する。
※3 個人単位では送らず、必ず教師がまとめて送る。
※4 下書きから清書までは、短期間が良い。
・・学校行事や情報が変わってしまう。

(4)
【B 校】・・相手校
A 校から手紙を受け取り、自校のペア（相手）－クラス、男女関係なくーを決め、配布する。

※1 紛失にそなえて、受け取った手紙のコピーをとる。
又、両校のペアの名前を控えておく。
※2 ペアの選定では、生徒の要望を聞くのも良い。

(5)
【B 校】
手紙の返事（下書き）を書く。
☆相手が確認できている
☆自己紹介や周囲のこと
相手の質問に答える
＜必需品＞和英・英和辞書
参考資料

※1 書式の指導
「Dear　名前」
※2 文章（並べ方）、語句の指導をする。
・・接続詞、代名詞の活用
・・単語は日常の授業で、学習内容との関連で指導
※3 表現方法を個別に指導する。
（こういう時どう言うか）
※その他留意点は A校と同様にする。

(6)
【B 校】
教師が下書きの誤りを訂正確認した後で清書をする
↓
A 校へ送付する

※留意点は A校に同じ

(7)
【A 校】
B 校からの手紙を受け取り、返事を書く。

（4）に戻る

6　研究の成果と課題

本研究では writing に対する意欲と能力を高めるための指導の工夫を試みた。具体的には、「他校の生徒という、実在する相手との英語による文通活動（意欲を高めるための工夫）」及び「意識調査により明らかになった、生徒が英文を書くことにおいて直面しがちなつまずきの原因を解消するための指導（能力を高めるための指導）」という２点であった。

以下に本研究の成果と課題を述べる。

(1)　成果

ア　手紙を書いた後の意識調査により、生徒にとって実在する相手に手紙を書いて自己表現を行うこと、また、その相手からも実際に返事をもらえるということが、生徒の書く意欲を大きく引き出し、生き生きとしたコミュニケーション活動を可能にすることが明らかになった。

イ　相手の手紙にある話題に対する自分の考えや、自分を取り巻く状況について書くことを指導した結果、生徒たちは相互理解を深め、互いの個性を尊重して書こうとする態度を身につけるようになってきた。

ウ　文通という自己表現に適した活動を、writing の指導に用いたことにより、手紙を書く回数が増えるごとに生徒の「書く活動」が free writing の段階に近づいていった。

エ　手紙を書く際に辞書を積極的に使用させたことにより、多くの単語や慣用句、文型を身に付けさせることが可能となった。また、相手の手紙にある未習の単語、慣用句、文型についても、「同年代の中学生が書いた文」であることに刺激を受け、それを憶え、積極的に自分も使っていこうという姿勢が生徒の中に見られた。

オ　この活動は、それぞれの生徒が相手の手紙にある話題を読み取り、異なった内容の文章を書くことを支援するものなので、徹底した個別指導を行うことができた。

(2)　課題

ア　生徒の文通に対する興味を持続させるためには、同地区内の学校間による文通よりも、話題が豊富になる他地区で環境の違う学校間による文通が望ましい。したがって、実際に文通を行う場合の相手校選びには配慮が必要である。

イ　文通による「書く能力」の向上のためには年間に数回の手紙交換が必要であると考えられるが、１通の手紙を書かせるのに、構想 → 下書き → 教師の添削 → 清書という段階を経るので、３～４単位時間が必要となる。また、阻害要因を取り除くための指導も計画的かつ継続的に行わねばならないので、綿密な年間指導計画が必要となる。

ウ　ＴＴ値と意識調査結果において、英語が比較的得意な生徒は書くことに対しての意欲及び能力の向上が見られたが、残念ながら不得意な生徒には望ましい結果は得られなかった。それらの生徒に対する基礎学力の習得（語い数を増やす・語順を徹底させる等）と、英語に対する総合的な興味・関心を喚起していくことの必要性を改めて認識させられる結果となった。

エ　阻害要因のうち「単語の配列」「英語での表現方法」については、多くの生徒が、指導後の意識調査でも「苦労した」「やや苦労した」と答えている。この２つをどのように指導していくかが今後の大きな課題である。

V　まとめと今後の課題

本研究では、コミュニケーション能力は、1) 実際にその言語を使用し、2) 互いの個性を大切にできる豊かな人間関係の中で高められる、という共通認識のもとで、「生徒が互いの個性を大切にし、生き生きとコミュニケーション活動に取り組む指導の工夫 ── 自己表現力の育成を通して ──」という主題を掲げた。この主題に迫るために、三つの分科会でそれぞれ仮説を立てて研究した。

第1分科会では、平成7年度教育研究員報告書の実態調査から、生徒の興味・関心が映画やビデオによる学習にあることに着目した。感動的、印象的な場面での英語は、その場面を思い出したときに自然に口をついて出てきやすい。そこで、ビデオの登場人物の表情や動作も参考にしながら内容を理解するリスニング活動を通して、生徒に自然な会話表現を学習させ、その表現をもとに彼らが生き生きした自己表現活動をできるように導いた。このような活動について、生徒は、「映画を使った授業はおもしろかった。またしてみたい。」という感想をもち、自己表現活動にも積極的に取り組んだ。この研究は、精選されたビデオ教材を用いた指導が、生徒のリスニングや自己表現活動への関心・意欲を高めることを明確にした。

第2分科会では、従来の授業では、習ってきた英語を総合的に駆使してコミュニケーションする機会が少なかったことに着目した。実際のコミュニケーションに対応するためには、たとえ文法的には不正確な表現であっても、自分自身の生きた言葉で自ら表現していける能力が必要である。分科会では、生徒が自分のもっている英語力を最大限に使わなければならないスピーキングの活動を、コミュニケーションの4機能（要求・依頼、伝達、情報収集、人間関係形成）の角度から作成し、試行することにした。この指導に対して、「自分のもっている語いや表現を十分に活用すれば、かなりの内容についてコミュニケーションすることができる。こういう活動をもっと続けさせてほしい。」という趣旨の生徒の声が多く聞かれた。このような活動を日常の指導の中に取り入れていくことで、授業への生徒の関心・意欲が高まり、コミュニケーションに生き生きと取り組む姿勢が育っていくものと、分科会では結論づけた。

第3分科会では、生徒のライティングへの意欲や能力を授業の中でいかに引き出し、高められるかを研究した。実際のコミュニケーションの場を提供するために、教員の勤務校間で生徒が英文の手紙を交換できるようにした。書かれた英文に対しては、Token & Type 値を求める方法で研究を深めた。教師がきめ細かな指導を行うことにより、生徒の手紙は回数を重ねるたびに語数が増え、異なった単語が使われるようになり、表現・内容が豊かになった。この研究で、学校間の英文手紙の交換が多くの生徒に英文を書くことの楽しさを味わわせ、書くことへの意欲を高めることがわかった。

本研究の全体をとおして、教室に実際又は実際に近いコミュニケーションの場を持ち込んだ結果、生徒は以前に増して、英語でコミュニケーションを図ることに興味・関心を示した。映画から生の英語を聞き取る楽しさ、四苦八苦しながらも自分の言葉で話せる喜び、実際の相手と文通で思いを書くときのわくわくした気持ち。このような生徒の気持ちを持続させながら、1) 上記のような活動を、どのように授業に継続していくか、2) 上記のような活動をするに際し、英語に苦手意識をもつ生徒に対して、どのように配慮していくか、3) 語いや表現をふだんからどのように増やしていくかは、今後の課題である。